

未熟な生、見知らぬものとしての世界

[Who&Work]パク・グニョン__劇団コルモッキ代表、演出家

パク・グニョンは、韓国演劇界にてもっとも注視すべき脚本、演出家である。独自の方法により彼は、携わる全作品において常に全く新しい試みや実験を行っており、こういった挑戦は批評家のみならず世間にも大きな波紋を起こしてきた。高校三年生の頃、パクは単に流浪の生き方への憧れという理由から劇団入りする。そのキャリアは末端から始まった。ポスター貼付やチケット売りを経験する中で、彼は次第に演劇に親しんだ。いずれ彼は、76Theater で本格的な舞台キャリアをスタートさせ、そこで演出家キ・グクソのもとで演劇論などを確立していく。1994 年には、パクは”Theater Lab Hyehwa-dong No.1”二期生の一員として、イ・スンユル、チェ・ヨンフン他と共にさらなる経験を積んだ。

76Theater と”Theater Lab Hyehwa-dong”にて、パクは実験的な舞台に挑戦した。これは二つの団体の作風によるところが大きいのもかもしれないが、彼は定型に疑問を投げかけ、そこからの脱却を図るつもりでもあった。「まともに演劇の勉強をしていないからかもしれないが、かねてより従来の演劇のルールに則り続けるべきかを考えていた。型にはまることなく、人の行動を表現しようと模索したんだ。」しかるべき指導を受けはしなかったが、パクは生の演劇に触れ続けることで確実に自身の演劇の知見を確立していった。彼は舞台の中で定型を学び、同時にそれを否定することで、独自の演劇技法や哲学をつくり上げたのである。

父親の不在

パク・グニョンが作品で繰り返し扱ってきたテーマが「家族」である。初期の作品『鼠』から、いびつな家族像が幾度となく描かれてきた。機能しない家族の物語『青春礼賛』をきっかけに、パクは演劇界の新星となった。それに続く『キョンスク、キョンスクの父』、『そんなに驚くな』などの作品も、批評家や観客から高い評判を得た。「辺りを見回しても、多くの人の不安とは家庭に関することだ。儒教の教えは未だ韓国文化を支配している。家庭は韓国の人々を縛るものであり、それを切り離すことなどできはしない。人はこの結びつきから逃れようとあがいては失敗し、いずれはこの『結びつき』こそが自分自身となる。それが多分、家庭というものだ。教養が無いせいかもしれないが、私には家庭についてのことが最も話しやすい。」パクにとって、家庭とは運命に縛られた人生を象徴するメタファーである。家族に関する強い結束や帰属の意識は、儒教の価値観である。彼の作品にみられる家族像は、今日の韓国社会における状況を映している。

パク・グニョンの家庭を描いた作品は、しばしば父親の不在を取り扱っている。『青春礼賛』での父親は、経済力を失ったことから離婚した元妻から、金を受け取りながら細々と暮らしている。『キョンスク、キョンスクの父』の父親は戦争が始まると、家族を残して一人で逃げる。こうした父

親たちは己の役割を果たせない、取るに足らない存在として描かれている。「朝鮮戦争直後の混沌とした状況の中では、技量もないまま家族を支えねばならなくなった韓国の父親たちは、途方に暮れただろう」とパクは説明する。パクの作品世界において、父親の不在とは急激な社会の変化に伴い崩壊した、従来の韓国社会を表している。これらの作品は、物質文明の急速な発達に取り残されかつての価値観だけが進化できずにいる、韓国社会への皮肉である。

「舞台は見て感じるものである！」

このように、パク・グニョン作品は周りの人間の人生より生まれ出る。舞台について何の知識もない状態から築き始めた演劇キャリアの中で、彼は「舞台とは大仰な何かではなく、見て感じるもの」だと気が付いたという。彼がただ周りで起こる出来事を語ることで、彼の作品は韓国社会に関する鋭い洞察を伝えるのだ。

パクが語るのは「今このとき、ここで」共に息をしている人々の物語であり、作るのは彼らのための舞台である。その結果、たとえ外国の舞台の翻訳版からでも、観客は韓国の普通の人々の生活を感じとることができる。「見失ってはいけないのが、私のオリジナルの脚本であれ、外国の脚本の翻訳版であれ、私の舞台の全ては韓国人が演じなければいけないということだ。どんなにその文化や細部が見事に描かれていたとしても、韓国の観客にとってはアメリカの中流階級の人々の話はなじみの薄いものだろう。韓国人のようにしゃべり、思考する登場人物でなければならない。だからこそ私は、外国の舞台の翻訳版を上演する前には、微妙に脚色を加えている。私が演出した『眠れない夜なんてない』（平田オリザ作）が良い例だ。日本人が大変礼儀正しいのは周知の事実だ。この舞台の脚本の大部分が、礼の場面だった。実際日本人が舞台と同じようにふるまうのだとしても、我々からすればどうも不自然に感じる。そこで私はこれらのシーンをより分かりやすく、自然にするための脚色を加えたんだ。」古典作品を舞台化する際も、彼は理解ができない台詞は取り入れない。このことから批評家は、彼の『ハムレット』や『チャイカ』などの舞台化作品は、やや浅薄であると評した。しかし、これらの作品は、非常に明快である。

役者をそのまま生かす役

パク・グニョン作品において、役者は全てと言って良いほどの最重要要素である。彼はさらに、その独特な仕事の進め方でも知られている。彼の芝居稽古は非常に和気あいあいと行われ、一見稽古よりも役者たちと遊んでいる時間が長いようにも見える。稽古時間中に北漢山の近くにピクニックに出かけ、あるいは稽古場の中で彼らと遊ぶ。日常と芝居とを切り離さない、これが彼の演劇論なのだ。「それぞれの役者に、独自の芝居への取り組み方がある。私は型にはまった方式にとられるよりも、役者たちにはその独自性を伸ばすように言っている。技術を磨き上げ、弱点を克服することは確かに重要だが、私が彼らに勧めるのは最も実力が出せる状態で、極上の表現

をするというのだ。つまり、最も得意なことを見つけてほしい。」役者が何を得意とするのかを特定することは大切であり、それらは日常の中で見つけることができる。演出家としてのパク・グニョンはゲーム等、日々の行動を通して役者の力を見出し、自身の作品にその力を宿していくのである。

制作の過程においても、役者たちは大きな役割を果たしている。パクは作品をつくる際、前もって全てを決めてはいない。大枠のみを決め、彼らと意見を交換し、稽古を重ねながら舞台をつくっていく。演出家としてパクは、役者の欲求を刺激し、それらを発散させる。言うなれば、彼らの才能を掘り返して才能と役とを同化させるのである。パクの作品において、演出家としての彼の仕事とは、役者たちがその才能を存分に発揮できる環境づくりをすることに尽きる。劇団コルモッキルの役者陣は自らの得意分野を熟知し、内なる感情を表現するよう鍛えられているため、パク・グニョン演出作品の外で、ひときわ抜きんでる。

パクは大枠の中で役者陣とともに作品をつくり上げるので、パク作品の出来は、どれほど役者陣との相乗効果を生むことができたかに大いにかかっている。「役者の力を最大限に生かせるかは全て、私次第だ。良い芝居をすることは重要だろうが、結果にはあまりこだわらない。興味があるのはそれまでの過程だからだ。」役者の重要性を強調し、舞台をつくることに喜びを見るパク・グニョンは、観客にそれほど重きを置いていないようである。「そうだな、どの作品も最後には観客に捧げるものだから。演出家として私は、普通の観客の目線で作品をつくっている。稽古やりハーサルの時も、この視点を持っているつもりだ。」

不条理な世界を不条理に描く

パク・グニョンの作品世界は、不条理な世界を不条理に描いているという点でハロルド・ピンターのに似ている。『キョンスク、キョンスクの父』は神の降臨ののちに、し烈な争いが突然雪解けを迎えるさまを描いた。『そんなに驚くな』では、自殺した父親がトイレで首を吊ったまましゃべる。「これらの状況はひたすらに不合理だ。しかし人の言うことにじっくりと耳を傾けてみれば、その言葉に合理性などまるでないということに気が付く。我々に必要なことは書く練習より、喋る練習だ。全体の文脈は整理されていないといけませんが、こと唐突に吐き出された言葉というのは、説得力を持つものだ。」この世が合理的であるというのは、現代人の思い違いである。実際の世界はむしろ、不合理や矛盾に満ちている。パク・グニョン演出の舞台は、不条理な方法で世界の真実に迫ろうとしている。彼は、こういった飛躍や不条理を「舞台でのみ表現可能な体験」と評した。

日常をそのまま描きながら、演劇的飛躍をしてみせるパクの作品は、観客に新鮮な刺激を与えてきた。主要なベテラン演出家であるパクだが、常に従来の方法論から脱しようと努めてきた彼

の作品には、若々しさ、新しさが見られる。それが、一部の観客がパク・グニョン演出作品に惹かれ続ける所以である。

投稿者 パク・ビュンスン

現在「The Musical」の編集主任であり、多様なメディアに向けたミュージカル関連記事を執筆している。パクはドラマや音楽をミュージカルにどう組み込むかに特に興味を持ち、独創的なミュージカルに愛情を注いでいる。

(翻訳／小針 彩)

The Apro.kr (<http://eng.theapro.kr/MA/>)

『未熟な生、見知らぬものとしての世界』2012.03.05 インタビュー記事より抜粋

リンクはこちらから http://eng.theapro.kr/?sub_num=61&state=view&idx=283